

武庫川女子大学

創刊号

FDニュース



巻頭言

学長 糸魚川 直祐

FDとは、ファカルティ (Faculty) つまり教員が、デベロップメント (Development) すること、つまり啓発し、成長することです。

いま、日本の大学・短期大学が直面している困難な状況を考えますと、FDほど大切なものはないと痛感しています。教員が学生一人ひとりを大切に、学生の能力を最大限に伸ばす教育を行わなければ、その大学・短期大学は消滅します。FDは、心のこもった質の高い教育を行うためのものです。

FDは、教員が、自分自身で、自分の授業・学生指導のあり方を直視することから始まります。教員が、自らを見て、考え、教員同士そして職員とも話し合い、学生の意見を聞き、保護者やさまざまな人の見方を視野に入れ、授業改革を実践し、それを繰り返して、大学としてより高い目標に向かって進むのがFDです。FDは空理空論の論議ではありません。困難な道ですが、情熱を注ぎ、ともに「FDロード」を歩みましょう。



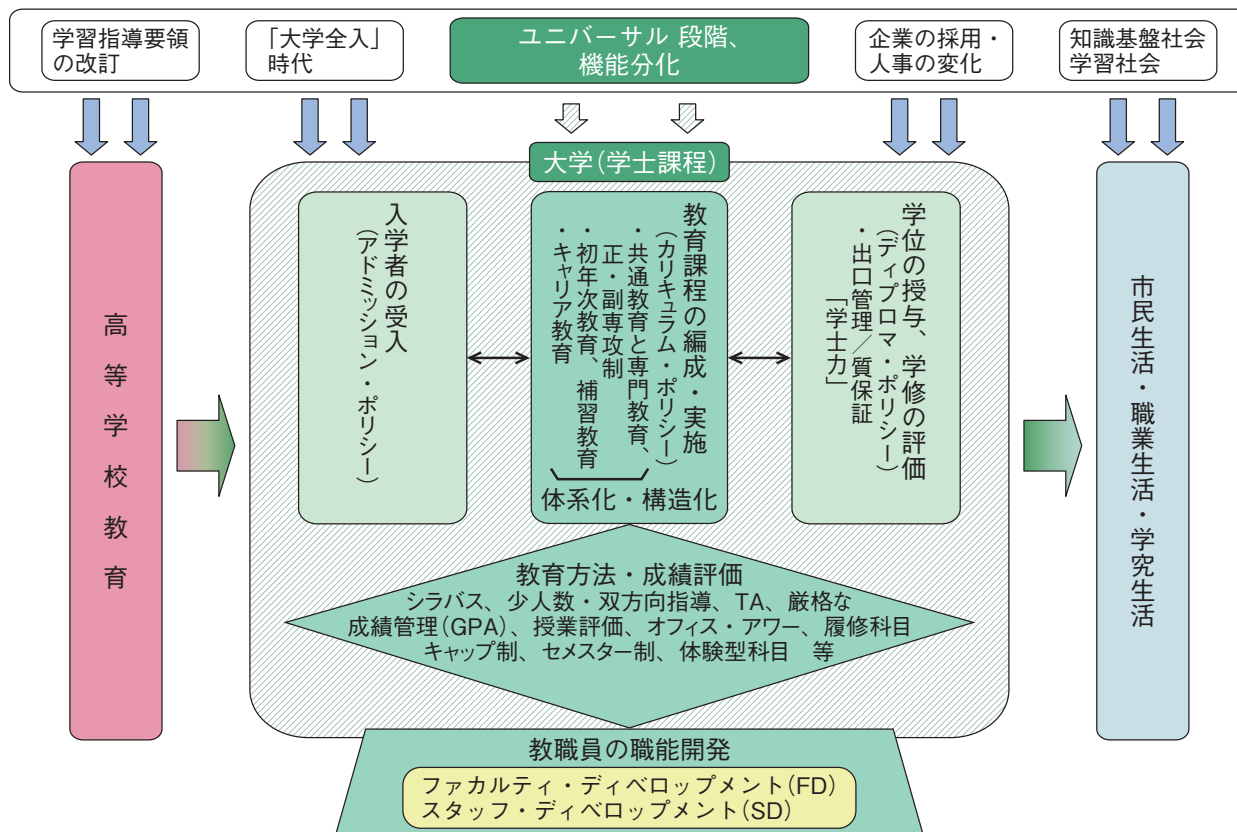
高等教育改革の動向とFDの位置

FD推進委員長 前原 健三

- I 平成20年4月より、大学設置基準等に基づき、大学・短期大学においても、組織的FD活動が義務付けられました。大学院については、すでに平成19年度より、大学院設置基準に規定されました。これらを受け、平成20年1月1日付けで武庫川女子大学FD推進委員会が立ち上げられ、本学「立学の精神・教育綱領・教育目標」のより一層の実践的具体化へ向けて、授業改善等を主たる内容とするFD活動を「組織的に構築していく」こととなりました。
- II 今日、高等教育をめぐる社会的環境の変化には、著しいものがあります。まず、高等教育を支える社会的基盤自体が、グローバルな知識基盤社会、生涯学習社会へと変容しつつあり、このような社会的変容に対応する形で、我が国の大学教育についても、「学士課程教育」という概念が導入されています。この新しい概念が導入された背景には、これからの大学が、未来の社会を支える「21世紀型市民」を幅広く育成するという「公共的な使命」を果たし、社会からの信頼に応えていく必要があるという、大学像をめぐる基本的な認識の転換があります。
- III 次に、大学の入口 (Input) の部分で、18歳人口の減少による学生獲得競争が激しくなるという状況があります。さらには、出口 (Output) の部分でも経済的不況が進行する中、就職をめぐる支援競争が大学の威信をかけて競われています。このような大学間競争が激化する状況に対して、その実質的中身 (Throughput) に係る「大学の教育力」が問われ始めました。つまり、大学院・4年制大学・短期大学それぞれの教育力及び研究力の内実とその効果が、これらを構成する教員及び職員の個々のレベルはもとより、学部学科のレベル、最終的には大学総体のレベルに互って、総合的に問われる、そのような意味において「新しい時代」に突入したということです。
- IV 上記のような、高等教育をめぐる競争的環境の変化に対抗し得る、最も堅実な高等教育経営戦略の一つは、高い質の教育を保障する大学総体の教育力の向上にあると確信します。大学総体の教育力を向上させるには、大学教育組織の基本単位である、学部学科等 (Faculty) の組織的教育力を開発 (Development) ・強化しなければなりません。さらに、学部学科の組織的教育力を開発・強化するには、そのための〈組織的Faculty Development〉が、大学総体→大学院・学部→学科→教員の各レベルにおいて、それぞれの実態と課題に即しつつ、継続的に展開され、さらなる改善が試みられねばなりません (中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」をご参照ください)。

▼ 本学FD推進委員会では、このようなFD活動を組織的に推進するため、その原動力となるプロジェクトを立ち上げました。緊急性を要する改革課題より優先的に取り組み、その経過を可能な限りホームページ等にて公開する方針です。FD推進委員会は、究極的には「高い知性と善良な情操と高雅な徳性とを兼ね具えた有為な女性を育成する」ためのFD活動を、糸魚川学長ご指導のもと、全教職員の皆様、そして学生諸君とともに推進します。本学教職員の皆様におかれましては、ご理解・ご協力のほどを賜りますようお願い申し上げます。

学士課程教育の改革 (中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」より)



平成21年度 武庫川女子大学FD推進委員会メンバー一覧

委員会は、学長指名の委員長、副委員長、各学部・学科からの推薦委員、教務部長、学長からの委嘱委員若干名で構成されます。本年度のメンバーは、以下のとおりです。

NO.	役職	所属	氏名	NO.	役職	所属	氏名
1	委員長	教育	前原 健三	11	委員	建築	大井 史江
2	副委員長	食物	高橋 享子	12	委員	音楽	今城 道子
3	委員	日文	廣瀬 唯二	13	委員	薬学	黒田 幸弘
4	委員	英文	山田 慎人	14	委員	共通	西尾亜希子
5	委員	教育	西本 望	15	委員	教務部長	高橋 幸一
6	委員	健康	徳家 雅子	16	委員	食物	松井 徳光
7	委員	心福	長岡 雅美	17	委員	法人室	瀧居 豊
8	委員	環境	西田 徹	18	委員	システム課	私市佐代美
9	委員	食物	花崎 憲子	19	委員	教務部	松本 全弘
10	委員	情報	赤岡 仁之	20	委員	教務課	藤本 泰子

平成21年度FD推進委員会 活動基本方針

FD推進委員会では、昨年度の活動内容を踏まえて本年度の活動基本方針を定めました。各学科や関連部局のご理解とご協力を得て、本学のFD活動をより一層発展させたいと考えています。

1 大学授業研究会

重点目標：私語のない、双方向の授業の創造的探求

報告観点：各学科からの実践事例報告の観点

(a) 私語対策として有効な方法例を紹介する学科グループ

(b) 効果的な双方向授業事例を紹介する学科グループ

(c) その他、特色ある実践事例を紹介する学科グループ

運営方法：上記(a)(b)(c)いずれかのテーマの観点から、学科等教員又はFD推進委員が、その実践事例を集約して報告し、この報告を踏まえて研究・協議する。

※昨年度の授業事例報告集も含めて整理し、まとめた内容を配布物として作成する。

2 広報活動

(1) FD活動HPの編集と公開、(2) FDニュースの発行、(3) FD関連情報を学科へ提供

3 講演会

本学非常勤講師等も含めた講師による、授業事例報告を企画・実施する。

※各学科に照会し、本委員会にて選定する。

4 成績評価関連情報の公開

中教審が求めている高等教育の質的保証の確保、つまり「厳格な成績評価基準」に基づき「公平な成績評価」を実施するため、昨年度、教育改革推進委員会より「成績公開の是非」について諮問を受け、FD推進委員会内で協議を行った。本委員会として教育改革推進委員会に答申する。

(FD推進副委員長 高橋享子)

これまでの活動内容

平成20年1月1日付けで本学のFD推進委員会が発足し、委員長・副委員長を中心に、各学科・共通教育部より推薦された教員や職員から成る委員19名で、様々な活動に取り組んできました。委員会では、FD活動を計画的に推進するため、次の5プロジェクトを設置し、各プロジェクトのリーダー並びにメンバーによる積極的な活動を展開しました。

平成20年度の活動状況

プロジェクト名	活動内容
大学授業研究プロジェクト	○公開授業開催 7月29日(火)「微生物学」食物栄養学科 松井徳光先生 10月1日(金)「英語文法」英文学科 三宅弘晃先生 ○大学授業研究会 9月～毎月開催 各学科推薦授業の事例報告 計6回
FD推進課題調査プロジェクト	○情報教育研究センターとの共催により、12月19日(金)学術講演会開催 「メディアを活かした教育の実践—iPod、携帯電話を活用した授業改善」 ○教務部との共催により、2009年2月25日(水)「初期演習事例報告会」開催
成績評価法研究プロジェクト	○成績評価関連情報の公開にあたり、FD推進委員へのアンケート調査実施。プロジェクトとして、継続審議の必要はあるが、学科内での成績公開とする方向で取りまとめた。
FD推進広報プロジェクト	○8月より、FD推進委員会のホームページ開設(学内専用) FD推進委員会の活動状況(イベント案内、実施報告等)を広報
武庫川学院全人教育実践開発研究プロジェクト	○「本学全人教育理念の具現化」というテーマの下で、各委員の報告を踏まえ、紙上討論を行い、本学教育の特色についてその熱い思いを語り合った。今後、学院全教職員の共通理解と協力を生み出すことの重要性和課題性が、確認された。

まず、「大学授業研究プロジェクト」では、7月に本学初の公開授業を開催した後、各学科推薦の授業実践事例報告をもとにした「大学授業研究会」を開催。多くの先生方の工夫された授業展開及び、授業運営上の問題点などにも接することができました。「FD推進課題調査プロジェクト」は、情報教育研究センターや教務部との共催形式で、各種講演会を開催しました。本学の教育改革推進委員会からの諮問に応えるために設置された「成績評価方法研究プロジェクト」は、成績公開を行うことの是非について、FD推進委員へのアンケート調査を実施し、プロジェクトとしての方向性をまとめています。「全人教育実践開発研究プロジェクト」は、本学の全人教育の現状と今後のあり方をプロジェクト内で確認しあい、今後の委員会活動の方向性を提示しました。「FD推進広報プロジェクト」は、各プロジェクトの活動をFD推進委員会のホームページを開設して周知するなど、各プロジェクトが連携して活動を進めました。この他、ひょうご神戸コンソーシアムや関西地区FD連絡協議会、各種学会など学外諸団体の活動にも積極的に参画し、初年度としてひと通りの成果をあげています。

(FD推進委員 私市佐代美)

本年度活動状況

6月9日(火)、本年度最初のイベントとして、4月より本学の英文学科にお迎えした、M. K. ブロックス先生の「リーディング1A」の公開授業を実施。受講生32名の授業に、本学附属中高の先生を含めた43名の教職員が授業を参観しました。授業後の意見交換会にも28名が出席し、ブロックス先生が実践されているコミュニケイティブ教授法の手法や考え方をお聞きしました。先生は、外国語は「書く」「聞く」「話す」「考える」など総合的にスキルを磨く中で向上するとし、また双方向の授業として、学生たちに小グループの課題を与えて一緒に作業をさせると、授業に集中して効果があり、学生からの反響を教員が共有することによって、高い成果が期待できると説明されました。参加者からは、巧みなコミュニケイティブ教授法への感想や、実践する上での具体的な工夫などが質疑されました。特に、授業を通して学生の声が小さいという指摘に、「日本の学生は完璧に話せなければ話さない方がましと思っている」と分析し、学生に自信を持たせようと工夫しているというブロックス先生の説明が印象的でした。



「リーディング1A」授業風景



「大学授業研究会」での質疑応答

また、本年度第1回目の「大学授業研究会」は、7月1日(水)の合同教授会終了後(16:20~17:45)、メディアホールで開催。約120名の教職員が参加しました。まず、生活環境学科学科長の横川公子先生は、「家庭生活論」を入学後の初期教育の一環と位置付け、その講義内容から知的な刺激を与え、周囲や対象への興味を活性化することで、双方向授業と私語の撲滅を目

指していると説明。続く、英文の山田慎人先生は、「国際関係論」等での事例から、一番の私語対策は授業内容の改善であるとし、学生が関心を持つ話題や、内容を薄めず分かりやすく教えることが重要と説明されました。一方で、関心の無い授業に学生が来るのは出席制度と甘い成績評価が原因であると分析し、その見直しが必要と指摘されました。最後に、共通教育部長の濱谷英次先生は、「情報メディア論」など長年「授業で心がけていること」として、最初の授業で「授業のモラル」を伝え、私語対策や双方向の授業を展開するために、学生心理の理解と配慮、授業での人間関係の構築が大切と説明されました。本学は私語対策に非常に早く(1990年)から取り組んできた先駆者であることを紹介されました。その後の意見交換会では、具体的な授業運営や成績評価方法に関する質疑応答の他、「学生に私語を注意している先生が非常に少ない」というアンケート結果など、様々な私語対策に関する課題が共有されました。

(FD推進委員 松井徳光)

お知らせ

今後の「大学授業研究会」

●第2回

10月7日(水)

- ・西山明美先生 (日文)
- ・福井哲夫先生 (情報)
- ・井上雅勝先生 (心福)

●第3回

11月4日(水)

- ・松本裕史先生 (健康)
- ・永島 茜先生 (音楽)
- ・林 宏一先生 (食物)

●第4回

未定

※いずれも、合同教授会終了後の予定です。

シリーズ 授業

— 初期演習奮闘記 —

共通教育部長 濱谷 英次

20数年前、本学に着任早々に短大1年担任を持った時のことである。最も困ったのは初期演習の進め方であった。当時、全学的な共通プランはあまり明確でなく、担任裁量の部分が多かった。前期は、ガイダンス、体育祭、宿泊研修でどうにか乗り切ったものの、後期は特段の話題もなく途方に暮れてしまった。そのとき、頭をよぎったのが「今の学生は何に関心があるのだろうか」ということであった。これをヒントに冒険ではあったが、各自が最も興味・関心を持っているテーマを選び、それについて調べた結果を原稿用紙20枚以上のレポートとしてまとめることを課した。学生の反応は「そんな大変なことをやるの!？」であった。そこで、率直に学生に問いかけた。「君たちは本当に自分が好きなこと、興味を持てることについて深く考えたことがあるか?」と。最初の1カ月は個々人の話を聞いて助言を行い、各自のテーマを決めていった。グループで取り組むテーマも、よく聞くと個々の関心は違っており、一組以外は個別テーマとなった。その後、資料収集に1カ月、レポート作成に1カ月、そして年末に全員が提出した。1週間かけてレポート全てに目を通したが、予想以上の力作揃いで、成果を担任一人が味わうのはもったいないと考え、年明けの授業で冊子とすることを提案し、312頁の「初期演習作品集」が出来上がった。この取り組みで驚いたのは、学生は平均で原稿用紙28枚という大変な課題を完成させただけでなく、企業などを訪問し聞き取り調査を行ったものや、資料を非常に丁寧に読み込んだものがあつたことである。その後、2年次の担任ガイダンスで、取り組み継続の意志を問いかけたところ2名の学生が手を挙げた。この取り組みは自主的なものであるため、仕上げて単位にはならないことを念押ししたが、それでもやるという。就職も内定した後、二人の学生は夫々のテーマについての続編を提出してくれた。

このことは、教員の働きかけ次第で、学生はその意欲や能力を存分に発揮してくれることを実証したものとして、今なお印象深い経験である。

「武庫川女子大学FD推進委員会規程」(抄)

平成20年1月1日 規程第1号

(目的)

第1条 武庫川女子大学の教育理念及び学部等の教育目標の実現を目指し、社会に役立つ有為な人材を育成するために、教員の主体的・恒常的に行う授業の内容及び方法の改善・向上に資することを主たる目的とし、大学全体で組織的に教育水準の質的向上を推進するため、学長の下に、武庫川女子大学FD推進委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(構成)

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- | | | |
|------------------------|-----|-----|
| (1) 文学部各学科から推薦された委員 | 各1名 | 計5名 |
| (2) 生活環境学部各学科から推薦された委員 | 各1名 | 計4名 |
| (3) 音楽学部から推薦された委員 | | 1名 |
| (4) 薬学部から推薦された委員 | | 1名 |
| (5) 共通教育部から推薦された委員 | | 1名 |
| (6) 教務部長 | | |
| (7) 学長が委嘱する委員 | | 若干名 |

2 委員長及び副委員長をおく。委員長及び副委員長は、学長が指名する。

(審議事項)

第3条 委員会は、第1条の目的を達成するため、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 授業改善のための基本方針の策定に関する事項
- (2) 教員の研修会及び講習会の開催に関する事項
- (3) 教員の教授法及び教授活動の相互研鑽に関する事項
- (4) FD活動に関する情報の収集と提供に関する事項
- (5) 各学科の教員へのFD活動の啓発に関する事項
- (6) 教員の教授活動の支援に関する事項
- (7) その他、学長の諮問する事項及び委員会が必要と認めた事項

(会議)

第4条 委員会は、原則として毎月1回会議を開く。

- 2 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、副委員長がその職務を行う。
- 4 委員長は、必要と認めた場合、委員以外の者を出席させることができる。

(庶務)

第5条 委員会の庶務は、教務部教務課が担当する。



編集後記

平成20年12月24日に中央教育審議会から出された「学士課程教育の構築に向けて」の答申では、大学独自の建学の精神や理念に立脚した教育方針・目的が確定され「学生が何を学んだから何ができるようになったか」が検証できる学生本位の教育体系の構築に力点が置かれ、さらに教職員へのFD/SD研修会の活性化が明記されています。

FD推進委員会の活動は2年目を迎え、大学授業研究会をはじめとする活動が軌道にのりつつあります。委員会では今年度新たに『FDニュース』を発行し、教職員の方々に直接FD委員会の活動状況をお届けすることとなりました。活動報告としてだけでなく、本学のFD活動を提言しあい、議論を深める場としてご利用いただけるよう努めてまいります。(編集委員KT)

【FDニュース編集委員会】

高橋享子、西本 望、長岡雅美、黒田幸弘、西尾亜希子、私市佐代美

